

そこに生きる人々よ

美崎理恵

◆登場人物

有島典介（ありしまのりすけ）

桑田英朗（くわたひでろう）

佐伯世々子（さえきよよこ）

町田徹（まちだとおる）

七瀬月（ななせつき）

久慈達也（くじたつや）

椋木富士子（むくのきふじこ）

城市アサ（じょういちあさ）

《時》現代。

《場所》日ノ出荘。コンクリートむき出しのかなり古い建物。その共同の場。ホール。

【一】

日ノ出荘の住人が集まるリビング。大きな古いテーブルが一つ。その周りに椅子が数脚散らばっている。部屋の隅には黒電話と椅子がある。ここは通常、七瀬月の定位置となっている。上手に行くときと玄関。下手に行くときと入居者たちの部屋や共同スペース（台所、トイレ、洗面所、風呂など）がある。

朝。佐伯世々子がスマホを見ている。ただ見ているだけである。気持ちは全然違うところにある。月は写真を見ながら黒電話で話をしている。テーブルでは町田徹が伏している。その傍には新聞紙。町田、かなり疲れている。

月 念。執念の念。怨念の念。念じるの念。念が渦巻いてるんです。ええ、生きてます。生霊ですね。ええ、ええ。（と相槌続く）

町田 （ボソッと）そんなことがありますかって……。

世々子 （町田に気づき）あれ？ いつ帰って来た？

町田 五分前からここにいます。

世々子 気がつかなかった、ごめん。

町田 別にいいですよ。

世々子 どうした？ 何かあった？

町田 いつものことです。酔っ払いがぐだぐだぐだぐだ……。

世々子 夜のシフトはねえ……。

月 間違いない生霊です。念です。ええ。そうですね。夜のシフトは、ええ。

（と相槌続く）

世々子 向こうも夜のシフトの話してるよ。

月 そうですね、刺激しないように。念ですからコントロールできないんです。しぶといですよ、念は。

町田 何言ってるんだか。

月 ええ。ではお気をつけください。また何かございましたら。はい、お振り込み、よろしくお願い致します。(電話を切る)

世々子 夜の仕事はどうした？

月 出るんだって。(言いながら町田の元へ)

世々子 (呟く) いいなあ……。

月 町田。

月、町田に新聞代を渡す。町田、新聞を月に渡す。

月 眠たいならベッドでおやすみ。

町田 疲れてて動けません……。

月 でも人が働いてる時に寝てるんだから――

町田 人が寝てる時に働いてますから！ だから疲れてるんですから！

月 そうね。おやすみ。

町田 (月の真似) 生霊です。間違いなく生霊です。(月に) でもね、世の中は形あるものの集まりですから。

町田、部屋のある下手へと引っ込む。

世々子 おやすみー。

月 長くないかもね。

世々子 え!!

月 辞めるよ。

世々子 ああ、仕事。びっくりした……。町田までいなくなるのかと思ったよ。

月 出てほしい？

世々子 ん？

月 さっき言ってた。いいなあって。

世々子 いいなあ？

月 うん。出るんだってって言ったら、いいなあって。

世々子 私が？

月 うん。

世々子 そうなんだ……。信じられないんだよね。

月 見つかってないからね。

月、新聞を広げて見る。

世々子 月さん、最近、新聞よく読んでるね。

月 今日の運勢パクツてるの。
世々子 そうなの!!

派手な服を着た棕木富士子が下手から出て来る。追いかけて、久慈達也。

久慈 やめときなって。

富士子 どうして？

久慈 どうしてって聞く？

富士子 聞いわよ。意味わかんないわよ。なんて久慈に止められなきゃなんないのよ？ あんたってホント邪魔ばっかするわよね。

久慈 俺が？

富士子 あなたよ。今、私、誰と喋ってんのよ。くだらないこと聞かないでくれる？

世々子 どした？

久慈 いや富士子さんがさあ、

富士子 今からデートなの。

世々子 え、こないだ別れたんじゃないかったっけ？

富士子 いつの話してるのよ。

久慈 それより相手だよ相手、誰だと思う？

世々子 知ってる人？

久慈 知ってるも何も、リョウちゃん。

世々子 リョウちゃん！

月 リョウちゃん。

久慈 ほら、みんな反対だよ。

富士子 どうして反対するかしら。

久慈 どうしてって聞く？ お金だまし取られて自殺未遂したの誰よ？ 風邪

薬大量に飲んで大酒食らって、ベッドで冷たくなりかけてたの誰よ？

富士子 あれね、今だから言うけど、久慈が助けるから。

久慈 は？

富士子 私は、リョウちゃんに助けてほしかったの。それなのに久慈が救急車呼ぶから。

久慈 俺が呼ばなかったら富士子さん死んでたよ？

富士子 呼ばなかったらリョウちゃんが助けに来てくれました。そしたら私たち、

別れてませんでした。

世々子 あのリョウちゃんが助けに来るわけがない。

富士子 あなたたちはいつもそうやってリョウちゃんを悪く言う。

世々子 リョウちゃんに何回騙された？

富士子 彼には彼の事情があるの。

月 富士子さん、あなた真っ黒。一筋の光も点も見えない。

富士子 あら、残念。月さん、外れちゃったあ。私ね、結婚するの。

久慈 誰と！

富士子 あんた今、私と誰の話してたのよ！

久慈 リヨウちゃん?!
富士子 というわけで私、こんなしみたれた場所とは間もなくおさらばします。
じゃあね、行って来まーす。

富士子、上手へと去る。

久慈 マジで？

世々子 何とかならないかなあ、あの性格。

月 仕方ない。あれが彼女の生き方なんだから。

世々子 あれ、生き方？

久慈 やっぱ俺、止めて来るわ。

世々子 は？

久慈 だって放つといったらまただよ？ 葉飲んで酒飲んで、俺また救急車呼んで、でまた言われるんだよ。久慈が救急車呼ぶから。そりゃないでしょ！
また俺のせい？ イヤだよ。止めて来る。

久慈、富士子を追いかけて上手へ去る。

世々子 久慈ってさあ、自分の人生、あれぐらい本気で悩めばいいのにね。いつも人の人生ばっか悩んでる。

月 それが久慈の生き方なんじゃない？

世々子 あれも生き方かあ……。生き方って何？

月 生きる、方法？

世々子 生きる方法。難しいこと言うね。

久慈が上手から戻って来る。

世々子 どした？

久慈 来た。

世々子 何が。

久慈 城市。誰か連れてる。

世々子 誰？

大家、城市アサが上手から来る。一緒に桑田英朗も来る。スーツ姿だがよれよれで乱れている。

久慈 おはようございます。

城市 おはよう。

世々子・月 (それぞれ) おはようございます。

城市 (桑田に) ここだよ。

桑田、不安そうに部屋を見回す。

桑田 なんか……空気淀んでますね。

城市 古いし、地下だからね。

久慈 あの……

桑田 あ、桑田英朗と言います。よろしくお願いします。

世々子 よろしく？ まさか……（城市を見る）

城市 ああ。

世々子 私、家賃払うって言いましたよね？

城市 いつまで払うつもりだい？

世々子 しばらくは。

城市 しばらくっていつまで？ 何のために？

世々子 それは……。

久慈 余韻、かな？（世々子、久慈を睨む）

城市 何が余韻だよ。もうすぐ四十九日だよ？ いつまでもネチネチ思ってるんじゃないよ。

世々子 ネチネチって――

城市 あの子だって成仏できないだろ。極楽へ行かせてやりな。行けるといいけどね。

久慈 あいつ、人生で迷子になってたからなあ。あの世へ行くにも迷子になるかもなあ。

城市 あんたは人の心配より自分の心配をしな。

月 （手をあげて）はい。

城市 なんだい。

月 部屋にはまだテンスケの物がそのままあります。

城市 使えてちようどいいじゃないか。

久慈 亡くなった人間が使った物を使いたくないよね？

桑田 僕は別に気にしません。

城市 ずっとじゃないんだよ。ちよっと世間と距離を置きたいだけなんだよ。

桑田 （世々子に）家賃は私が払います。

久慈 お金はあるの？

桑田 あります。

世々子 だったらホテルに泊まればいいじゃない？

城市 色々あるんだよ。あんたたちもそうだっただろ？。

久慈 （桑田に）俺たちみんな、行き倒れ寸前のところを城市に拾われてきたの。

城市 威張って言うんじゃないよ。

久慈 感謝してるんですよ。

城市 だったらさっさと出て行きな。それが私への恩返しだよ。

久慈 と言われてもねえ。

城市 久慈、あんた最近、職安行ってるかい？

久慈 職安なんて古い。何十年前の言葉ですよ？ 今はハローワークだし、行か

なくても求人雑誌やネットでちよちよと——
何でもいいよ。ちゃんと働きな。

城市
久慈
（世々子に）働きな。

世々子
働いてるわよ。

久慈
（月に）働きな。

城市
月。あんたも奇妙な商売だけど、電話の前ばかりにいないで、たまには外に出て新鮮な空気を吸いな。

月
はい。

城市
あと町田っていうコンビニ男と、さっきここに来る途中で出会った派手な女がいただろ？

桑田
ああ。

城市
あれもこの住人だから。ま、こんな頼りない者ばかりだけど。

桑田
はい。ありがとうございます。

城市
あんたたち、頼んだよ。

久慈・月
（それぞれに）はい。（世々子は納得せず返事をしない）

城市
あ、そうだ、昨日、田部ちゃん見たよ。

久慈
えっ、どこで？

城市
駅前のスーパで。試食コーナーの周りをうろうろしてたよ。

久慈
試食？

城市
（上手に去りながら）何してたんだか。あれなら電話してやりな。何かあったのかもしれないから。

世々子
はい。

城市、上手へと去る。久慈、すぐに電話をする。桑田はじろじろ部屋の中を見て歩く。

月
田部ちゃんって？

世々子
月さんが入る前に一緒に暮らしてた人。

久慈
（電話をしながら）こっち来てるなら連絡くれればいいのに、どうしたんだろ。

世々子
いい家の息子に気に入られちゃってね、二年前、結婚して出て行ったの。

久慈
ん？

世々子
どした？

久慈
使われてませんって。

世々子
番号変えた？

久慈
（再度、電話しながら）マジで何かあったのかなあ……。電話を切ってちよちよと出て来るわ。

久慈、上手へと去る。

世々子
ほら、まだだよ。人のことにはすぐ首突っ込む。

月 あれぐらい他人のことを考えるようにならないとね。
世々子 え？
桑田 なんか……

世々子、月、桑田を見る。

桑田 冴えないところだな……

世々子、月、啞然と桑田を見る。

桑田 私の部屋は？

月、下手を指差す。桑田、下手へと去る。

世々子 今、冴えないとこだって言った？

月 仕方ない。事実だから。

世々子 突然やって来て何……

桑田が下手から顔をのぞかせる。

桑田 どの部屋ですか？

月 (世々子に) 忘れるいいチャンスかもよ？

月、桑田と一緒に下手へと去る。

世々子 忘れたかないよ……

【2】

二日後の朝。ホール。久慈、求人雑誌を見ている。月は黒電話で電話をしている。

舞台が広ければ、別空間として有島典介が時々現れてもよい。舞台上を走って移動している。上手から下手へ、下手から上手へ。

月 はい……はい……。 (と相槌が続く)

町田が上手から来る。疲れている。

久慈 お帰り。お、今日も疲れてるね。

町田 僕、あのコンビ二辞めます。

久慈 え、辞めるの？

町田 はい。
久慈 何で？

町田 この間、お腹痛くなったじゃないですか？

久慈 ああ、よかったねあれ、治って。

町田 コンビニは僕の心配をしてくれませんでした。

久慈 コンビニには無理だよ。

町田 酔っ払いに絡まれた時も助けてくれませんでした。僕はこんなにコンビニ

二のことを思っているのに……。

久慈 辞めてどうすんの？

町田 別のコンビニで働きます。

久慈 またコンビニ？ ハハ、俺にはわかんないよ。

町田 僕にもわかりません、パチンコ。

久慈 パチンコはわかりやすいでしょ。君の定義でいいけば、目の前に存在して

るんだから。例えばパチンコ台をコンビニで売ってたらどうよ？ 絶対

好きになってるよ。

月 そうですね。

町田 定義とかそういうことじゃなくて、パチンコに人生をかけるって意味が

わからないんです。

久慈 ま、俺もお前の頭ん中、わかんないからね。

月 そうですね。

世々子が下手から来る。典介の服を着ている。

町田 あれ？ それテンスケさんの服じゃ……。

世々子 桑田が着てたから脱がせた。

町田 でも何でも使えて、城市が言ったんですよ？

世々子 テンスケ以外がこれ着るの、見たくない。

久慈 お前はいいの？

世々子 私はいいの。(久慈が求人雑誌を見ていることに気づいて) あれ？ 働く
の!!

久慈 まあちよつとね。

町田 何かあったんですか？

久慈 昨日の夜ね、駅前のスーパーで見つけたんだよ、田部ちゃん。

町田 田部ちゃん！

世々子 会ったの？

久慈 うん。

世々子 (町田に) この前、城市が見たって言ってたの。(久慈に) 元気だった？

久慈 それがさあ、旦那の会社、倒産したんだって。

世々子・町田 ええっ。

月 はい。

久慈 携帯も解約して、だからつながらなかったんだな。

町田 玉の輿だつてみんな喜んでのに……。

月 はい。わかりました。では。(電話を切つて町田の元へ)

町田 どうしてるんですか？

久慈 一人でどこかアパートにいるんだつて。やつれちゃつてさあ。食べていくのがやつとみたい。

世々子 えー……。

久慈 田部ちゃん、聞くんだよ俺に。久慈さん、私、みんな失っちゃつた。これからどうやって生きて行けばいい？つて。

町田 そんなにひどい状況なんですか？

久慈 うん。もう涙目ウルウルで、俺も辛かつたよ。でも俺だつて金ないし、人脈ないし、無責任に「大丈夫」なんて言えないだろ？ 部屋でも空いてりゃ戻つておいでつて言えるけど、今ダブってるんだもん。だから俺、笑いで田部ちゃんの心をほぐそうと思つたの。で、言つたの。「そうだなあ……銀行強盗でもしてみたら？」

世々子 何それ。

久慈 (笑顔で) 田部ちゃん、笑つてた。俺の一言で心、和んだんだな。

町田 意味わかんないです。

久慈 わかんなくてもいいんだよ、田部ちゃんに笑顔が戻ってきたんだから。

月 笑うしかなかったんじゃない？

久慈 いや、あの笑顔は本物だつた。俺、久しぶりに生きててよかつたと思つたよ。人のためになるっていいもんだな。

月 町田。

月、町田に新聞代を渡し、新聞を受け取る。

町田 月さん、僕、コンビニ辞めます。

月・世々子 あら。

町田 だから新聞、これからは自分で買つてください。

月 転職？

久慈 またコンビニだけどね。

世々子 また？

町田 新たな一歩です。

月 それ大事。

町田 ですよね。

月 新聞、朝一でなくていいから続けてお願いできる？

町田 いいですけど……

月 私も新たな一歩を歩くことになった。ちっちゃな町なの。

世々子 ん？

月 私の地元。今父がその町長をしてるんだけど、もう出馬しないことになつて。

久慈 出馬？

月 うん。出る。
 世々子 え、選挙？
 月 うん。
 町田 え、月さんが選挙に出るんですか？
 月 うん。
 久慈 え、月さんが立候補するの？
 月 うん。
 世々子 月さんが町長になるの？
 月 うん。
 久慈 月さんが？
 月 うん。
 町田 え、月さんが？
 月 何。だめ？
 世々子・久慈・町田 （それぞれに）いや、だめじゃないけど……。
 久慈 大丈夫？
 月 私？ 大丈夫。
 久慈 いや、町。
 月 大丈夫。
 世々子 選挙よ？
 月 大丈夫。後援会すっかりしてるし、小さな町でみんな知ってる人だし、対
 町田 抗馬出ないし、我が家、町長の家系なの。
 月 もしかして、それで新聞？
 久慈 新聞ぐらい読みなさいって父親が、勉強する。がんばる。
 月 がんばるってそんな簡単じゃないよ？
 久慈 だからやめろ？
 月 いや、やめろとはいわないけど、
 久慈 家賃安いし、それなりに暮らしていけるし、そりゃここにいたらゆるく
 何とか生きていけるけど、違う生き方もあるかなって。
 世々子 でも、月さんが町長なんて似合わないよ。
 月 やってるうちに似合うようになるんだって。
 久慈 ならない、ならない。
 世々子 ならないよ。
 月 じゃ聞くけど、私の生き方、このままでいいと思う？ ずっとここでみん
 なに見えないものと向き合って、詐欺だ、嘘つきだ言われながら生きてい
 くのでいいと思う？
 久慈 そんなの町長しても言われるよ？
 月 まあね、言われる人は言われる。
 世々子 今の仕事は？
 月 町長の仕事しながらは無理でしょ。
 町田 バレたら炎上ですよ。
 月 黙ってりゃわかんない。

町田 いやいやいやいや……。

月 自分でもわからなくなってるんだよ、この能力が本物かどうか。当たるも八卦、当たらぬも八卦の世界だから……。とにかく町長になる。(町田に)
新たな一歩だよ。

町田 ま、そうではありますけど……。

典介の声 ただいまー。

一同 え？

典介が上手から入って来る。

世々子・久慈・町田・月 ええっ！

典介 やっと着いた！。

世々子、久慈、町田、月、茫然と典介を見る。

典介 おー、月ー。(月にハグする) ただいまー。
月 ……。

典介 町田ー。(町田にハグする)

町田 なんて……。

典介 久慈ー。(久慈にハグする)

久慈 お前……。

典介 世々子ー。ただいまー。(世々子にハグする)

世々子 テンスケ？ 本当にテンスケ？

典介 え、何で？

世々子 テンスケ……テンスケだ……テンスケー。(典介に抱きつく)

久慈 テンスケ！(典介に抱きつく)

町田 テンスケさん！(典介に抱きつく)

典介 え、何？

月、じつと典介に見ている。

典介 (月に) こいつらどうした？

月 今までどこにいたの？

典介 どこに？

月 何してたの？

典介 何してた？

月 どうやって帰って来たの？

典介 どうやって？

月 どこから帰って来たの？

典介 どこから？ どこからだっけ。憶えてない。

月 どこから覚えてる？

典介 あー、気がついたら走ってた。
月 どこを？

典介 どこを？ どこをって……。ああ、あれかな。ほら、よくあるだろ。犬を
遠く離れた所に置き去りにしてもちゃんと戻って来るっていう、そうい
う感じ？

世々子 本能？

典介 そ、本能だよ、俺の。

久慈 (笑って) お前、犬かよ！

典介 (笑って) 犬じゃねえよ！

月 テンスケが川で流されたのを見たって人たちがいる。溪谷で溺れている
子供を助けようとして川に飛び込んで、子供は助かったけど、テンスケは
流された。

典介 でも俺、流されてないじゃん。

久慈 だからみんなびっくりしてるんだよ！

月 ちゃんと説明して。

典介 え、俺が帰って来た、それで十分だろ？ 何か問題ある？

久慈 ない！

典介 それ以上何か必要？

久慈 ない！

月をのぞいて一同、笑う。

桑田が下手から出て来る。

桑田 ん？

典介 誰？

桑田 桑田です。

典介 クワタ？

久慈 あ、テンスケ――

桑田 テンスケ？ テンスケさん!! 死んだんじゃ――

典介 おい！ 気安く呼ぶな。俺の名前はのりすけ。辞典の「テン」に介護の「カ
イ」。テンスケって呼んでいいのは日ノ出荘の奴らだけだ。

桑田 私、住人です！ ここの。

世々子 あ、テンスケ、桑田さんはね、城市がその……テンスケの部屋をね……。

典介 俺の部屋？

世々子 うん。桑田さんに……。

典介 何で！

久慈 だから死んだと思ってんだよ、みんな。

典介 生きてるだろ！

桑田 どうしましょう。私、今テンスケ――

典介 のりすけ！

桑田 のりすけさんの部屋使ってるんですけど……。のりすけさんの物も好き

に使っていいって言われて――

典介 ええっ!!

世々子 困るわよね? 桑田さんには申し訳ないんだけど――

典介 まあいいや。

世々子 は?

典介 いい。

世々子 いいの?

典介 いい。あれこれ言ってる時間がもったいない。その代わり、俺の邪魔をす
るな。

久慈 何の邪魔?

富士子が上手から来る。

富士子 だい――テンスケ!

典介 あ、富士子ちゃん! (富士子にハグする)

富士子 生きてたの!!

典介 何だよ富士子ちゃんまで。

富士子 え、本物なの?

典介 決まってるだろ。

富士子 うそ! 夢みたい!

典介 夢じゃない!

富士子・典介 ハハハハ!

富士子 ねえ、テンスケ、聞いて聞いて。またみんなして私をいじめるのよ? リ

久慈 ヨウちゃんはだめだって。

久慈 リョウちゃんとまたよりを戻したんだよ。

富士子 違うのよテンスケ。今だから白状するけどあれね、リョウちゃんが助けに
来るはずだったのに久慈が救急車呼ぶから、

久慈 ほらまた俺だよ。

富士子 それよりリョウちゃん、今大変なの。お父さんの借金肩代わりして、返さ
ないと殺されちゃうの。

世々子 そりゃ大変だあ大変だあ。

富士子 テンスケ、どうしたらいいと思う?

久慈 あのね、富士子さんは悩まなくていいの。富士子さんが代わりに借金して
あげる必要もないの。

富士子 あんたには聞いてない。テンスケに聞いているの。

典介 富士子ちゃん、相変わらず大変なんだな。でも俺、今それどころじゃない
んだ。

富士子 え?

典介 邪魔しないでくれる?

富士子 何の?

典介 俺、芝居を書くんだ。

一同 は？

典介 書く。書くために戻って来たんだ。書ける喜び！ イツキイツカイで書く！（上手へと向かう）

富士子 ちよっとテンスケ？

富士子、典介について行こうとする。

典介 ついて来るな。

富士子 リョウちゃんの話聞いてくれないの？

典介 だからあ、邪魔するなって！ 俺の部屋に近づくな！

桑田 私、家賃払ってます！（典介について行こうとする）

典介 俺の部屋だ！

桑田 でもテンスケさん――

典介 のりすけと呼べ！

桑田 のりすけさん。

富士子 のりすけ、どうしたの！？

三人、部屋に去って行く。

町田 富士子さんまでのりすけになっちゃいましたよ。

【3】

翌日。ホール。典介がテーブルで原稿用紙に向かって書いている。その横に桑田。離れた所に世々と久慈と月と町田と富士子。桑田と典介の様子を見ないふりをしながら見ている。典介、桑田の質問に書きながら答える。

桑田 パソコン使わないんですか？

典介 使わない。

桑田 持ってるんですか？

典介 持ってない。

桑田 便利ですよ？ 買しましょうよ。

典介 すっからかん。

桑田 旅には出るのに？

典介 旅に出るからすっからかん。

桑田 旅ってそんなにいいですか？

典介 日常から抜け出したい時ってあるだろ。

桑田 ありますね……。テンスケさんの――

典介 のりすけ！

桑田 のりすけさんの日常はどんな日常なんですか？

典介 桑田には関係ない。

桑田 知りたいんです。

典介 (無視して書く)

桑田 教えてくれるまで私、聞きますよ。のりすけさんの日常はどんな日常なんですか？ のりすけさんの日常はどんな日常なんですか？ のりすけさんの日常は――

典介 (イライラが募り) ベルトコンベアーに載って！

桑田 はい！

典介 箱が流れてくるわけよ、向こうから。それに蓋をするんだ。

桑田 蓋？

典介 毎日朝九時から夕方六時までずーっと。それをずっと続けてたらふと思わわけよ。俺、何してんだ？ ほかに何かすることあんじゃねーの？ 俺、一生こうして蓋してんのか？ もうそう思い始めたらダメ。仕事辞めて、あるだけの金持って旅に出る。はい。(書く)

桑田 面白いですね。ベルトコンベアーに蓋と一緒に、自分の人生載せるんですね。なかなか興味深いです。で、何で急に芝居を書く気になったんですか？

典介 (さっと桑田を見て) 知りたい？

桑田 はい。(一同もうなずいて典介を見る)

典介 ……見たんだ。(自分の世界に入っていく)

桑田 何を？

典介 体育館。高校の時、見た風景とまったく同じ風景だった。

桑田 高校の時？

典介 巡回公演が来たんだ。「全校生徒は体育館に集合しなさい」って校内アナウンスが流れて、俺、全然興味なかったけど、勉強よりいつかと思って体育館に行ったんだ。そしたら、あの殺風景で味気ない体育館が宇宙みたいになって、星を旅する物語？ そんな話がばぁー……って！ 内容はもう忘れちゃったけど、ばぁー……って！ 俺、なんかすごい感動して、興奮のシャワー浴びて面白れーって。で、気づいたんだ。世界は一つじゃない。今俺が生きてるこのどうしようもない現実の世界と、何でも夢見ていい世界とがあって、夢見ていい世界では俺が自由に生きていくことができる……。これってすごくないか？ すげえだろ？ 俺、それに気づいた瞬間、その感動引っ提げて演劇部に走ったわ！ そしたら城市がいて、

別空間に城市と部員たちがいる。部員は世々子、久慈、月、町田、富士子が演じる。

城市 今度の大会で芝居書く人。

典介 みんなに聞いてたんだ。はーい！

典介、手を挙げながら部員たちの中に加わる。

城市 誰だい？

典介 有島典介（のりすけ）です。辞典の「てん」に介護の「かい」。

城市 ありしまのりすけ。でも、のりすけって顔じゃないねえ……。

典介 そう？

城市 よし、テンスケにしよう。

典介 テンスケ？

城市 テンスケ、書きたいのかい？

典介 はい。

城市 書いたことはあるのかい？

典介 ありません！ でも書きたいんです。俺が自由に生きていい世界！

城市 そんなに簡単には書けないよ？

典介 でも書きたいんです！

城市 書けそうかい？

典介 書きたいんです！

城市 面白いものを書くんだよ。

典介 はい！

城市 みんな、いいかい？

部員たち いいです！

城市 じゃテンスケ、そのやる気を信用しようじゃないか。書いてごらん。

部員たち お願いします！

典介 はい！ 嬉しかったなあ。なんて幸せなんだろうって思ったよ。（書く）

楽しくて楽しくていいじゃんいいじゃん！

楽しく原稿用紙に書く典介。その周りで「テンスケ頑張れ！」など声をかける部員たち。

典介 でもそのうち。

部員たち そのうち？

典介 書いてはつまり、書いてはつまり。

部員1 どうしたテンスケ？

典介 どうした俺？

部員2 おいおいおい！

典介 ヤバイヤバイヤバイ！

部員3 おいおいおいおい！

典介 書けない……書けない！ それからはもう地獄。書けなくてさあ、ホント書けなくてさあ。みんなには順調に書いてまーす、とかなんとか言いながらホント書けなくてさあ。で、城市に言ったわけ。

典介、城市と部員たちの元へ。

典介 書けません！
城市 テンスケ、あんた書くって言ったんだからね。責任持って書きな。
典介 でも書けなくてさあ。
城市 投げ出すんじゃないよ。
典介 でも書けなくてさあ。
城市 逃げるんじゃないよ。
典介 でも書けなくてさあ。ごめんなさい！

典介、走って逃げる。

城市＋部員たち テンスケ！

典介 （走って逃げながら）俺、途中で放り投げちまった。

「テンスケ！」と追いかけて来る部員たちを煙に巻いて逃げる典介。

典介 その後、学校に行くのイヤになって退学。

別空間にたむろしている不良たち。不良たちは世々子、久慈、月、町田、富士子が演じる。典介、彼らの中に入って座り込む。

典介 悪い奴らとつるむようになって城市ともそれっきり。のはずだったのに、五年前。

城市がやって来る。

城市 テンスケ！
典介 城市！道でばったり出会って、
城市 あんた、こんなところで何してるんだい！（不良たち、逃げて行く）
典介 はは、何してるんでしょう。
城市 こっちが質問してるんだよ。
典介 俺も質問してんだよ。
城市 久しぶりに会ったのに何だいその態度は。
典介 こんな人間になっちまったよ。
城市 こんなの意味がわからないねえ。
典介 逃げてばかりの人生よ。
城市 若いモンが何言ってるんだい。
典介 俺も年取ったよ。
城市 笑わせるんじゃないよ青二才が。
典介 （城市をジッと見て）城市、相変わらずだな。
城市 人の顔を見てる暇があるなら、さっさと立ってついて来な。

典介、立ち上がる。

典介 俺をどこに連れて行く気だ。天国か、地獄か？

城市 日ノ出荘だよ。

典介 日ノ出荘？

城市 シェアハウスだよ。

典介 それはどこにあるんだ？ 天国か、地獄か？

城市 この世だよ。

典介 この世が一番怖ろしい。

城市 ああ、でも生きている人間にはこの世しかないからね。

典介 あ、言っとくけど俺、金ねえから。

城市 家賃、よその四分の一だよ。

典介 四分の一！

城市 それぐらいなら何とかなるだろ。で、一人で生きていけるようになったら出て行きな。うちはそれまでの仮の宿だよ。

典介 じゃ遠慮なくお世話になります！ってなわけでここに飛び込んだわけよ。悪さばっかで親から見放され、仕事もない金もない、これからどうやって生きていきますかって時だったからさあ。でも、この部屋に入っすぐ城市のやつ、言いやがった。

城市 テンスケ、あの時のあの芝居、書けたかい？ わたしゃ今でも待ってるからね。

典介 書けるわけじゃないじゃん！ 俺にはもうあの頃の感動はないんだから。でも城市は俺の顔を見るたびに聞くんだ。書けたかい？ 書けたかい？ いい加減にしろよ！ 俺は書けないんだよ！ もうあの頃の俺じゃないんだよ！ 俺はずっとずっと逃げてた。そしたら……旅の途中で現れたんだ。巡回公演……。高校の時と全く同じだった……。あん時の感動がぱあーって！……書ける……書けるぞ……俺は書ける！ 書く！

典介、書き始める。

桑田 ああ、テンスケさん。

典介 のりすけ。

桑田 のりすけさん、失礼ですが、これまで書いたことはないんですよね？

典介 ない。

桑田 本当に書けるんですか？

典介 イッキイッカイで書く。

桑田 イッキイッカイ？

典介 (胸を叩いて) ここで書く。(典介は書き続ける)

桑田 ああ……お忙しいところすみません。ちょっとどうしてもお聞きしたいんですけど、生きる先が見えないって怖くないんですか？ お金なくて不安じゃないんですか？ どんな感じなんですか？ すっからかんな

るって。どうして家賃滞納して旅になんか出られるんですか？

典介
あのね。

桑田
はい。

典介
あんたが今いるこの日ノ出荘は、日の出の見えない日ノ出荘なの。わかる？（書く）

桑田
日の出の見えない日ノ出荘……。テンスケさん。

典介
のりすけ！

桑田
私の人生にもう、日の出はないかもしれません……。 （典介は無視して書き続ける）私は一流企業のお客様対応部門、苦情係で働いていました。そこはいつも、一つ言えば十にも百にも千にもなって返ってくるクレームの嵐が吹き荒れていました。そのクレームはいつも私の耳から脳へと上がり、脳の中でぶくぶく膨らみ、ぶくぶく全身へと広がっていくんです。ぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶく。ある日、客への対応が悪いと上司に叱られました。クレームです。客からクレーム、上司からクレーム。私の周りはクレームでいっぱい。クレームが膨らんでいく。ぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶく。ぶくぶくが膨らむ、ぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶく。そしてあの日、ついにぶくぶくが爆発的に増殖したんです。（叫んで）うわーっ！ （ずっと様子を見ていた世々子たちは桑田の叫びに驚くが、典介はひたすら書いている）私はマイナスのエネルギーを蓄えた怪物になってしまったのです！ 憎悪の塊、憎しみの塊です。もう抑えられない。私は社内で暴れまくり、暴言を吐き、最後には机の上で奇声を発し、そして逃亡――

典介
（怒って）うっせーよ！

一同、驚いて典介を見る。

典介
書けねーだろ！ どうして書かせてくれねーんだよ！ だいたい俺は、あんたが俺の部屋であれこれ聞いてきてうるさいからこっちに來たんだぞ！ それなのに何でまた一緒にいんだよ！ 書かせろ！ 邪魔すんな！

典介、上手へと入って行く。

一同、啞然と見送る。

【4】

同日。原稿用紙に向かっている典介が浮かび上がる。その周りに世々子、久慈、月、町田、富士子、桑田。富士子、典介の元へ。

富士子
テンスケ、リョウちゃんと結婚しようと思うの。テンスケはどう思う？
典介
（ひたすら書く）

富士子 みんなは反対するんだけど、テンスケだけは賛成してくれるよね？
典介 (ひたすら書く)
富士子 ねえ、テンスケ。
典介 (富士子を見て) 邪魔するな。(書く)
富士子 ……

ひたすら書く典介。富士子は去り、久慈が来る。

久慈 テンスケ、ラーメン食べに行こう。
典介 (ひたすら書く)
久慈 お前の好きな満腹亭だよ。
典介 (ひたすら書く)
久慈 チャーシュー、一枚やるよ。
典介 (久慈を見て) 自分で食べる。
久慈 え……

ひたすら書く典介。久慈が去り、町田が来る。

町田 テンスケさん。僕、コンビニ替わったんです。
典介 (ひたすら書く)
町田 コンビニも昔に比べたら仕事が増えちゃって……俺も自分探しの旅でもしてみようかなあ……なんて考えてるんですけど……
典介 (ひたすら書く)
町田 邪魔ですね。
典介 (ひたすら書く)
町田 はい。

ひたすら書く典介。町田が去り、月が来る。月、典介を見ながらそのまま去り、桑田が来る。

桑田 のりすけさん、昨日はすみませんでした。
典介 (ひたすら書く)
桑田 でもこれまで、こんな私をみんな怖がるばかりで、こんな私に怒鳴ってくれたのはテンスケさんだけで……
典介 のりすけ！
桑田 はい！ これからもどんどん怒鳴って叱ってください！ よろしくお願
いします！

ひたすら書く典介。桑田、頭を下げ去り、世々子が来る。

世々子 テンスケ。

典介 （ひたすら書く）
世々子 順調？
典介 （ひたすら書く）
世々子 テンスケがいない間、相談相手いなくて困ったよ。
典介 （ひたすら書く）
世々子 やっぱ同志って大切だって。

ひたすら書く典介。世々子、寂しそうに見る。去る。
世々子、久慈、月、町田、富士子、桑田が典介を見つめている。

富士子 頭、打ったんじゃない？

久慈 あ、俺も思った。溺れてる時に岩か何かで。

富士子 でなきゃこんなに性格変わらないでしょ。頭打って健忘症になってしまったとしたら、色んなことを忘れてても納得できるじゃない？

久慈 あり得る。

町田 じゃ健忘症になったとして、一カ月以上、どこにいたんですか？

富士子 どこかに保護されてたのよ。

町田 そしたら何らかの連絡が入るんじゃないですか？ SNSだってあるんですから、誰かが情報発信して拡散されますよ。

桑田 子供を助けて流されたのはのりすけさんじゃないってことはないですか？

世々子 テンスケがリュックを下ろして川に飛び込むのを見た人が何人もいる。

桑田 別の人が何らかの理由でのりすけさんのリュックを背負ってたとか。

町田 観光客の撮った写真にあのリュックを背負ったテンスケさんが映ってたんですよ。

桑田 そうか……。

町田 でもやっぱ、まずは病院には連れて行った方がいいと思うんですけど……。

富士子 無理でしょ、これじゃ。

間。

久慈 わかった！ あれだよ、ほら、よくあるじゃない？ 何かの拍子に誰かと誰かが入れ替わったみたいなの。つまり溺れた時に助けた子供と入れ替わっちゃった。ということは？ 元に戻るにはまた溺れるしかない！

町田 久慈さん……

久慈 冗談だよ。みんな深刻そうにしてるから笑わせようと思って。ここは笑うところ。ははは。

町田 面白くないですよ。

世々子 冗談なんかいらないから。

久慈 深刻な時ほど笑いが必要なの。

富士子 あんたこそ病院に行った方がいいわよ？
久慈 そうそう、そういう冗談必要！ ははは！

一同、冷たく久慈を見る。

富士子 冗談じゃないから。

世々子、富士子、町田、桑田、下手に去る。

久慈 何？ 冗談も通じなくなった？ テンスケもおかしいけど、みんなもおかしいよ？（月に）ね。

月 負のエネルギーは伝染しやすい。

月、去る。

久慈 どういうことよ？

久慈、去る。

典介、ひたすら書いている。

暗転。

【5】

誰もいないホールに町田が上手から来る。手には新聞。

町田 月さーん。

町田、テーブルに伏す。疲れている。月が下手から来る。

月 おはよ。

町田、月に新聞を渡す。月、町田にお金を渡す。
月、新聞を広げて読む。町田、月を見ている。

月 何。

町田 どんな顔して町長するのかなあと思って。

月 町田、私の透視能力、信じてる？

町田 商売してて今さら何ですか。

月 町田はどうして形のあるものしか信じない？

町田 だって目に見えないものや、触ってわからないものってどうやって判断

するんですか？ 存在っていうのは形があって初めて認められるんです。目に見えるものが行き交うことによって、世の中は成り立ってるんです。透視は？ 見えないじゃないですか？ 何とも言えるじゃないですか？

月 町田。持つて生まれたものは否定できないんだよ。町田のその顔だって、いやだって言ってもその顔が町田でしょ？ それといっしょで、私にもこの能力がくっ付いてる。これが私なんだよ。

町田 月さん、町長になるんですよね？

月 (微かな迷い) うん。

町田 だったらもうそういうこと考えなくてもいいんじゃないですか？

月 町田、人間は悩める生き物なんだよ。

町田 悩んでるんですか？

月 ……。

世々子と久慈が下手から来る。

世々子 だめだって。

久慈 ちよつと声かけるだけだよ？

世々子 書き終えるまでそつとしてあげてよ。

町田 久慈さん、だめですよ、テンスケさんの邪魔しちゃ。また怒鳴られますよ。

久慈 いや、もしあれなら桑っちゃんを俺の部屋につて思ってたさ。

町田 いずれ月さんが出るから、そこに入ればいいんじゃないですか？

月 早く出る？

町田 そうじゃないですけど……出るんですよね？

月 (微かな迷い) うん。

桑田が上手から来る。

桑田 帰りました。

久慈 あれ、桑っちゃん、外出てたの？

桑田 ちよつと散歩に。

久慈 出られるようになったんだ。

桑田 隠れ隠れ。

久慈 そんな隠れながらじゃなくても堂々と歩こうよ。

桑田 どこかで誰かが、ほら、あれ、叫んで暴れた奴だよって言うような気がして……。

久慈 ないない。もうそんなこと忘れちゃお。なるようにしかないんだし。

桑田 まあ、そうですね……。

町田 今日、天気いいですね。

桑田 そうなんです。びっくりしました。

久慈 ここにいちや全然わかんないよね。日も当たらないし、風もふかないし、

雨も雪も関係なし。

桑田 世の中、こんなのんきな人たちがいるんだって、ちよつと驚いてます。あ、悪い意味ではないです。私の周りの人間はみんな上に行く事や、お金を貯めることばかり考えているので、すごく……はい……。

久慈 まあ、俺たちも入ったばかりの頃はね、焦ってたんだけどね、長い間いるとこんな感じよ。ははは。

富士子 みんな城市に『こんなとこ、長くいるもんじゃないよ。金儲けできるようになったらさっさと羽ばたきな』って言われて入ったんだけどね、みんな羽ばたかずにずーっ……といるの。

久慈 桑っちゃんもずっといいよ。

月 バカ言わないの。(桑田に) ねえ、テンスケ、どんな感じ？

桑田 ずっと書いてますね。

世々子 やっぱり怒ったりする？

桑田 まったく。

久慈 もしあれだったら桑っちゃん、俺の部屋に来ない？

桑田 大丈夫です。のりすけさんの中に私という存在はないようですから。ちよつと寂しいくらいです。私は仲良くなりたいんですけど。

世々子 だめよ、邪魔しちゃう。

桑田 わかってます。

富士子の声 テンスケー。

世々子 え？

富士子の声 テンスケってばー。

世々子、慌てて下手に去る。

町田 富士子さん、唯一の味方がなくなっちゃって必死ですよ。

久慈 リョウちゃん話を聞いてくれるのはテンスケだけだったからなあ。

世々子が富士子連れて下手から来る。

世々子 だめだって邪魔しちゃう。

富士子 ちよつと話がしたいだけなんだって。

世々子 そのちよつとがだめなんだって。

久慈 富士子さん、完成まで待とう、ね。

富士子 今すぐ相談したいの！ リョウちゃんのこと――

月 気にかけてほしいだけでしょ？

富士子 は？

月 注目されたいだけ。

久慈 まあまあまあ。(富士子に) 書き終わったら話聞いてくれるから。

月 完成したら消えちゃうかも。

久慈 は？

世々子 どういうこと？

月 テンスケ、見えないの。真っ白。

富士子 あなたねえ、私は真っ黒で、テンスケは真っ白？ 結局何も見えないってことじゃない。

月 もうこの世には存在してない。

世々子 どういうこと……。

月 死んでる——

世々子・富士子 ちょっと！

久慈 （笑って部屋の方を指差し）いるよ？

月 何かに突き動かされてる。

町田 月さん、透視じゃなくて現実的なところで話しましょうよ。

月 テンスケは川に流されてそのまま——

世々子 そういうこと気軽に言わないで！

月 世々子もおかしいって思ってるでしょ。どう見たって前のテンスケじゃない。

世々子 だから死んでる？ バカ言わないでよ！ どこから死んでるなんて言葉が出て来るのよ！

月 テンスケの書くっていう念が彼を動かしてる！

町田 だから透視じゃなくて現実的なところで——

月 何も覚えてないのよ？

久慈 だから、溺れてる時に頭打ったんだって。で記憶喪失。辻褄合うじゃない？

月 海まで流された。だから遺体が見つからない。辻褄合うじゃない。

世々子 だからそういうこと気軽に言うなって！

月 警察も言ってた！

富士子 生きてるんだから遺体あがらないに決まってるじゃない！

月 念が残ってここまで戻って来た！

富士子 死んだ人間が戻って来るか！

世々子 テンスケ、いるじゃん！ あの部屋の中にいるじゃん！ それが何で死んでるになるのよ！

典介が下手から来る。

典介 うっせーんだよ！

一同、驚いて典介を見る。

典介 邪魔するなって言っただろ！ 集中させろよ！ 書けねーだろ！

典介、みんなを睨みつけて、下手に去って行く。

世々子 いるじゃん……。

月 執念の念、怨念の念、念じるの念。「書く」っていう念だけで戻ってきた。

世々子 もうやめてってそういうの……。

月 見守って書かせてあげよう。

世々子 は？

月 明日が四十九日。書かせてあげよう。

世々子 何言ってるの……？

月 書いたら念は消える。

世々子 どういう意味……。

月 成仏できる。

世々子 書き上げたら……。

月 消える。

富士子 あんた、どうかしてる。

月 どうかしてたら私もうれしいよ。

少しの間。

桑田 あの……またのりすけさんを怒らせてしまうかもしれませんが、聞けばいいんじゃないですか？ 本人に。死んでる？ 生きてる？ って。

久慈 そうだよ……聞けばいいんだよ。ちよっと一っだけ質問させてって。みんな揉めてるからって。そうだよ。（と言いながら下手に行きかけて、足を止める）っていうかさあ。何が問題なの？ 書かないって言ってたテンスケが書き始めた。俺たち、邪魔って叱られた。それだけのことじゃない？ 「久慈、俺、書けないよー」って騒いでたテンスケが本気で書くようになった。それだけのことでしょ？ 別に悪いことでも心配することでもないんじゃないの？ 本人言ってたじゃん。芝居観たって。高校時代を思い出して、あの頃の感情が戻ってきたって。また書きたくなったって。それをみんなが邪魔をする。だから怒る。そうだよ、邪魔しなけりゃいいんだよ。それより、生きてたことをもっと喜んでやろうよ。生きてたんだから、死んだと思ってた奴が。こんなうれしいこと、ないじゃない？

月、下手に去ろうとする。

世々子 どこ行くの。

月 聞いてくる。

世々子 何を。

月 生きてるの？ 死んでる――

世々子 死んでるわけじゃない！ 何バカ言ってるのよ！

富士子 月さん、だいたい問題はテンスケじゃなくて、あなたなのよ。何で生きる人間を死んだことにしなきゃならないの？ 何で私たち、あなたの嘘っぱちに振り回されなきゃならないの？ 透視って言葉を使って、現実

と非現実をゴッチャにして、何が楽しいの？ みんなも騙されちゃダメよ！ この女は、口にあること全部、透視って隠れ蓑に包んで生きてるんだから。自分の言葉なんて持っちゃいない。いいわよね、それなら無責任に何でも言える。

月　じゃ聞くけど、リョウちゃん、どうした？

富士子　は？

月　富士子さん、真っ黒なのよ、真っ黒で何も見えない。嘘ついてるでしょ。

富士子　……。

久慈　嘘って？

月　本当はリョウちゃんとより戻してない。

久慈　そうなの？

月　リョウちゃんなんて過去の人。付き合ってるない。

富士子　ちゃんと付き合ってるわよ！

月　結婚も嘘。

富士子　嘘じゃないわよ！

月　全部作り話。だいたいあの金食い虫のリョウちゃんが富士子さんにお金ねだるわけない。ただみんなにかまってほしくて――

富士子　（月の肩を押して）いい加減にして！

月、倒れる。

月　何すんのよ。（富士子の肩を押す）

富士子、机の上に寄っかって倒れる。置いてあった新聞を掴み、それで月を叩く。

富士子　嘘ばかり！　嘘つき女！

月　嘘つきはそっちでしょ！

富士子　嘘つき！　嘘つき！

二人、体当たりの喧嘩になる。久慈、止めに入るが反対に二人に攻撃をされる。

久慈　（喧嘩を眺めながら）はあ……もういいよ。やれやれだよ。二人で勝手にどうぞ。

月と富士子、つかみ合いの喧嘩。久慈は椅子に座り、破れた新聞を手にとって見る。と、思わず椅子から立ち上がる。

久慈　ええっ！

と同時に典介が下手から来る。

典介 うっせーんだよ！

一同、驚いて典介を見る。久慈だけは新聞を見ている。

典介 書けねーだろ！ 書かせろよ！ 書いてーんだよ！ 邪魔すんなよ！

俺は書くために戻って来たんだよ！ 書いて、書いて、書いてあともう少しなんだよ！

久慈 これ……

一同、久慈を見る。町田、久慈の手になっている新聞を見て、

町田 ええっ！

富士子 どうしたの？

典介を残し、一同、久慈の周りに集まり、新聞を見る。

桑田 銀行強盗ですか。田部さちこ。聞いたことのある名前ですね。

世々子 田部ちゃん……嘘……。

富士子 何で銀行強盗なんか……。

町田 久慈さん……。

久慈 俺だ……俺のせいだ……

一同、久慈を見る。

典介 もうすぐ書き終わるんだ。そのまま静かにしてろ。

久慈 テンスケ……。田部ちゃんだぞ？ ここで一緒に暮らしてた田部ちゃん。

覚えてないのかよ。

典介 覚えてらあ。でも俺は書かなきゃなんねーんだよ！ お前らと一緒に悲

しんでる時間はねーんだよ。

久慈 なんだよ、書く書くって！ これまで書かずに逃げてばかりいた奴が偉

そうに言うな！

典介 偉そうにだろ？が何だろ？がいいんだよ！ 俺は書く！ 邪魔する奴は

久慈 だろ？が何だろ？が許さねえ！

久慈 俺もお前を許さねーよ！

典介と久慈、掴み合いの喧嘩になる。典介、久慈に馬乗りになる。世々子は下手に走って去る。

富士子 テンスケ、やめて！

町田 テンスケさん、久慈さん、死んじゃいますよ！

攻撃をやめない典介。町田、桑田、富士子、典介をとめようとする。月が見ている。世々子、下手から戻って来る。手には原稿用紙。

世々子 テンスケ！

世々子、原稿用紙をビリビリと破る。典介、それに気づき、

典介 やめろ！ ああ！ 俺の芝居が……ああ……俺の芝居が……

典介、破られた原稿用紙を抱いて泣く。

【6】

世々子、久慈、月、町田、富士子、桑田がばらばらに座っている。そして典介がいる。皆の空想が繰り広げられる。

富士子、典介の元へ。

富士子 テンスケ。

典介 富士子ちゃん、どした？

富士子 私ね、みんなにうそついちゃった。リョウちゃんのこと、あれ、うそなの。

ちよっとみんなにかまってほしくて。

典介 おーうそでよかったよ！ よかったよかった。

富士子 でも、みんなを怒らせたのよ？

典介 大丈夫大丈夫。俺がいい具合に言っというてやるよ。みんなすぐ忘れるって。

バカな奴らばかりだから。(ニツと笑う)

富士子 典介はやっぱり優しいね。

典介 富士子ちゃん。ほら、笑って笑って、ラララララ。

二人、手を取り「ラララ」と踊る。入れ替わりで月が来る。富士子は戻る。

月 典介。

典介 おう、月。どした？

月 私、田舎へ帰る。透視やめる。

典介 え、なんで？

月 当たるも八卦、当たらずも八卦。目に見えるものじゃないから、確信っていうか、証拠っていうか、そういうものないじゃない？

典介 自信ねえの？

月 あるつもりだけど……。それでも周りから見ればただの嘘つきなんだよね。当たってもらわなきゃ困るし、でもね、当たってほしくない時もある

典介 んだよ……。 (と典介を見る)

月 も大変なんだなあ。

典介 生き方変えようと思う。町長になる。

月 チョウチョウ！ チョウチョウってあのチョウチョウ？

典介 うん。あの町長。

月 月、似合ってるよ！

典介 え、どの町長かわかってる？

典介 もちろん！ あのチョウチョウだろ？ いいなあ。 (と手を羽ばたかせる)

月 ホント？

典介 俺、応援するよ。

月 ありがとう！

典介 あー、俺も生き方変えてーなあ。どうしたら変わんのかなあ。かつこよくなりてえなあ。

月 かつこいいよ。書いてないテンスケもカッコよかったけど、書いてるテンスケもカッコいいよ。

典介 マジ？

月 うん。

典介 はっはっはー。

二人、何度もハイタッチ。入れ替わりで久慈。月は戻る。

久慈 典介。

典介 久慈。どした？ 真面目な顔して。

久慈 (貯金箱を見せる)

典介 え！ お金貯めんの？

久慈 ああ。

典介 すげえじゃん！ どうやって貯めんの？

久慈 パチンコ。

典介 パチンコかあ。

久慈 だめ？

典介 難しいんじゃない？

久慈 そっか？

典介 ね、なんのために貯めんの？

久慈 へへ。

典介 あ！ わかった。聞かねーよ。聞かねー。でもわかった。

久慈 ホントわかった！？

典介 寄付五百円。(貯金箱に入れる)

久慈 サンキュー！

典介 頑張れ、田部ちゃん！

久慈 おまえ、言うなよー！

典介 田部ちゃん！ 田部ちゃん！ 田部ちゃん！ (続ける)

久慈、寂しそうに典介を見つめる。「田部ちゃん」と叫んでいる典介に、入
れ替わりで桑田。久慈は戻る。

桑田 テンスケさん。

典介 何？

桑田 え？

典介 は？

桑田 ええ！

典介 何。

桑田 うわっ！

典介 何！

桑田 ああっ！

典介 何だよ！

桑田 テンスケさん！

典介 だからなんだよ！

桑田 テンスケさん！

典介 だから何なんだよ！

桑田 はははは！

典介 （笑って）なんだよ、変な奴だなあ。

桑田 はははは！ テンスケさん！

典介 （おかしくなつて）はははは！ 何だよ！。

二人、笑う。入れ替わりで町田。桑田、戻る。

町田 典介さん。

典介 お、町田。今日も疲れてる？

町田 大好きなコンビニで、物に囲まれて働いてて幸せなはずなのに、なんでこ
んなに疲れるんでしょうね。

典介 町田、抱きしめてやろうか？

町田 は！？

典介 おまえ、実は人一番、人恋しいんじゃないの？

町田 はあ！？

典介 物物って言いながら、実は人間が一番好きなんじゃないの？

町田 そんなことないですよ！ 人間なんて不確か極まりないじゃないです
か！ 怒ったり泣いたり喚いたり、そういう目に見えない感情を持って
るものは嫌いなんです！ もう信じないことにしたんです！ もう騙さ
れたくないんです！

典介 抱きしめてやるよ！（抱きしめる）

町田 僕にそんな趣味はない！

典介 俺にもねーよ！

典介、町田を抱きしめる。

町田 あ……あったかい……。

典介 (ギューツと抱きしめて、笑い、離れる) どうだー。

町田 案外心地よかったりして。

典介 だろ？ ははは。

二人笑う。一同、笑う典介を見つめる。町田戻る。

笑っている典介、やがて真顔になり、破れた原稿用紙を抱きしめ、座り込む姿が浮かび上がる。さっきまでの書くという勢いも怒りも消えている。その周りを囲む世々子、久慈、月、町田、富士子、桑田。

久慈 最後まで書けるのかねえ……。

世々子 書けないとどうなる？

月 さまよう。

富士子 まだ言ってる。

世々子 テンスケ、さまようの？

桑田 この日ノ出荘で地縛霊？

町田 いなくなってしまうよりいいかも……。

世々子 最後まで書き上げたら……？

月 消える。

一同、典介を見つめる。

月 書き上げても書けなくても、あの頃のテンスケは戻って来ない。

世々子 最悪……。 (下手に去る)

久慈 だったら最後まで書かせてやりたいな。

久慈が下手に去る。それに続き、富士子、町田、桑田、月、下手に去る。

世々子が下手から戻って来る。手には原稿用紙とペンとセロハンテープ。それらをテーブルの上に置く。

世々子、破った原稿用紙を集めて、机の上に置く。

世々子 書いて。

典介 もう書けねえよ。

世々子 だめだよそんな……。

典介 破っというてよく言うよ。

世々子 いなくなっただけじゃなかった……

典介 は？

世々子、破れた原稿用紙を組み合わせせてセロハンテープで張り合わせていく。

典介 いっしょだな。

世々子 え？

典介 高校の時と。書きますって言っというて書けなかった。あの時も破った原稿用紙を前に何もできずに逃げた。

世々子 今回は私がそばで見張ってるから。

典介 ……

世々子 さっきまで書く気満々だったんでしょ。書けるよ。

典介 ……

世々子、セロハンテープで張り合わせていく。

典介 俺……何かあった？

世々子 え？

典介 思い出せないんだ……

世々子 もうそんなことどうでもいいから。

典介 俺……どうやってここまで帰って来た？

世々子 もう過ぎたことだから——

典介 でも——

世々子 いいんだってそんなことどうでも！

典介 ……

世々子 あのね、もう誰も邪魔しない。みんな協力するから書いて。

典介 書けねーって。こんな状態じゃ全然書けねーって。

世々子 典介！

典介 ……いつもそうさ。書いてー気持ちはあっても途中で逃げてしまう。もう逃げ癖がついてんだな。俺はいつもこうやって中途半端。

世々子 私も一緒だよ。なかなかOK出なくてリライトばかり。私、この仕事向いてんのかなあって、もう辞めちゃおうかなーってしよっちゅう思ってる。

典介 (小さく笑う)

世々子 何。

典介 おまえ、よくゴロゴロ引っ張ってここ歩いてたよな。

世々子 ゴロゴロ？ ああ。

スーツケースが下手から転がって出て来る。

典介 「お出かけ？」って聞いたら「帰る」って。「どこへ？」って聞いたら「九州」って。「なんで？」って聞いたら、

世々子 もういい。もう無理。もうここまで。

典介 どした？

世々子 だめだった。全然見向きもしてもらえなかった。全然面白くないって。
典介 ほかの会社当たればいいさ。
世々子 才能ないんだよ。やめる。もう書かない。
典介 まあいいけど？

少しの間。

世々子 今度はいけると思ったんだよ！
典介 だったらその会社に見る目がなかったんじゃないの？
世々子 世の中みんな見る目がなかったらどうすればいいのよ！
典介 (笑って) 何弱気になってんだよ。逃げてちゃだめだめ。
世々子 え？ それ、典介が言う？
典介 は？
世々子 逃げてちゃだめだめ、城市。
典介 あーそれ言うな……。
世々子 いつまで逃げてんのよ！
典介 逃げてるわけじゃねえよ。書いてーけど書けねえの。結果逃げてるように見えるだけ。
世々子 わかった！ 締切だよ、締切があれば書ける！
典介 やめてくれー、そういう縛りは嫌いだ。
世々子 ほら逃げてる、逃げてる逃げてる！
典介 逃げてない！
世々子 逃げてるー。
典介 って、結局いつも俺がなじられ、なぜかお前は満足して部屋に戻って行く。

世々子、スーツケースを下手に転がし、スーツケースは下手に消えていく。
二人、スーツケースを見送る。

典介 お前、いつまでここにいんだよ。
世々子 ……
典介 もうここを出てもやってけんじゃねえの？ こんな変な奴らばかりいる所で書くより、ちゃんとした環境で書いた方がいい作品書けんじゃねえの？
世々子 出て行って言うの？ (月、久慈、町田、富士子、桑田がのぞいて見ている)
典介 勝負してみろって言ってんだよ。俺なんかよりよっぽど書けるのにもったいないだろ。
世々子 そんなことないよ……。
典介 あるよ。みすみす可能性潰すなよ。(月が下手か出て来て、二人の話を聞く)
世々子 じゃ私も頑張るから、テンスケも頑張ろ。
典介 ……

世々子 高校の時に見た風景を見たって言ってたじゃない？
典介 ああ、突然、城市の「テンスケー」って声が聞こえてきて、あの体育館で
の公演が現れて……。何だったんだ、あれ……。
世々子 ……

典介、世々子、黙り込む。

月 城市だ。

久慈 は？

月 城市だったんだ……。城市を呼んで。

町田 城市？

月 早く。

久慈、そつと二人の後ろを横切って上手へと去る。
と走って戻って来て、月たちの元へ。

久慈 来た。

富士子 誰が。

久慈 城市。

月 念だよ。念がやって来た。

城市が上手から来る。

城市 典介！

典介 城市！

城市 あんた、生きてたのかい！

典介 俺、死んでたのか？

城市 こっちが聞きたいよ。

典介 俺、何も覚えてなくて……。ただ書きたくて……

城市 書きたくて？

典介 戻って来たんだ。

城市 やつと書く気になったんだね？

典介 でも俺、もしかしたら死んでるのかも――

城市 あー、そんなことどうでもいいんだよ。

典介 いいのかよ？

城市 ああ、生きてようが死んでようが書きさえすればいいんだよ。だって書く

ために戻って来たんだろ？

典介 でも、俺また逃げ出すかも――

城市 はあ!!

典介 ごめんなさい！

典介、部屋に戻ろうとするが、そこには世々子、久慈、久慈、月、町田、富士子、桑田がいる。
城市、破れた原稿用紙を読んでいる。

世々子　ちよ、典介！　逃げちゃだめだよ！
典介　うっせー！　放っとけ！

下手に入ろうとする典介をみんなで止める。

典介　部屋に戻る！
桑田　私の部屋です。
典介　俺の部屋だよ！
桑田　お金は私が払ってます。
典介　うるさい！
城市　テンスケ！
月　呼んでるよ。
典介　聞こえねー。
富士子　何ばか言ってるのよ！
城市　テンスケ！
世々子　ほら。
町田　はーい。
典介　お前！
町田　今行きます！
久慈　（城市の所へ行き）少々お待ちを。（戻る）時間かせいどいたぞ！
典介　なんなんだよ、おまえら。
世々子　なんなんだよ？　知りたい？
久慈　言ってやれ。
世々子　私たちは、日ノ出荘で、ここで、あんたとずっと一緒に暮らしてきた面々だよ。言っとくけど、あんたの芝居の本、待ってるのは城市だけじゃないからね！　私たちもだからね！
……
典介　テンスケ！
町田　呼んできますよ。
久慈　行ってこい！（肩を叩く）

典介、城市の元へ。

城市　テンスケ、いいんじゃない？
典介　え、マジで？
城市　めっちゃめっちゃだけどね。
典介　めっちゃめっちゃねえだろ！

城市

いいんだよ、めっちゃめっちゃでも、魂がこもってりゃ。いいかい、この一つ一つのセリフはあんたが書く瞬間瞬間に出会う一期一会のセリフだよ。

典介

いちごいちえって、何？

城市

忘れたんかい！ いっきいっかいって書くんだっтар。

典介

ああ、いっきいっかい。

城市

典介。魂で書きな。ぼろでも情けなくてもいいから最後まで書きな。嵐が来ようが、槍が降ろうが、天地がひっくり返ろうが、この世とおさらばしようが、とにかく最後まで書く。そしたらそこに行ったら行ったで、また新しい何かが待ってるよ。

典介

書く。

城市

できたら持って来な。

典介

書く。

城市

今度は逃げ出すんじゃないよ。逃げても、わたしやとことん追いかけるからね。

典介

書く。いっきいっかいで書く！

典介、世々子が持って来た原稿用紙にもすごい勢いで書き始める。

城市、その姿を見て微笑み、上手に去る。

世々子、久慈、月、町田、富士子、桑田、典介の書く姿を見る。

典介、原稿用紙を離れ、舞台中の空間に向けてペンを走らせ始めると、高校の巡回公演の明かりとなる。

典介

すげえー！ すげえー！ なんかすげえー！ はははは！ 俺、書くわ。俺の世界を書くわ！ 書いて、書いて、前に進む！ 諦めねえ！ 下手でもなんでも、ぼろでも情けなくても書いてみせる。書いてみせっから！ 書く、魂で書く！ いっきいっかいで書く！

典介、空間に向けてペンを走らす。書いて書いて書いて。

そんな典介を見つめる一同。その中で典介の姿が浮き立つ。

典介、書いて書いて書いて、そして筆を置く。原稿用紙を持ち上げ、天に叫ぶ。

典介

わーーーーーっ！

一瞬にして舞台は真っ暗に。

世々子

テンスケ！

明かりが戻ると、典介は笑顔で飛び跳ねながら踊るように、みんなの間をすり抜け、消えていく。その姿は世々子たちには見えていない。テーブルの上には書き上げた原稿用紙。

世々子 典介？

一同、典介の名を呼びながら探しに散らばる。

世々子 消えちゃった……。よかつたんだよね……。 (月を見る)

月、寂しそうにうなづく。

世々子 よかつたんだよね……。

溶暗。

【7】

テーブルに世々子。月は電話をしている。

月 念。執念の念。怨念の念。念じるの念。念が渦巻いているんです。ええ、生きてます。……生霊ですね。ええ……ええ…… (と続く)

町田が新聞を持って入って来る。

世々子 お帰り。

町田 生霊です。間違いなく生霊です。

世々子 相変わらず疲れてるね。

町田 人が寝ている時に働いてますから。

富士子が部屋から出て来る。追いかけて久慈。

久慈 やめときなって。

富士子 どうして？

久慈 どうしてって聞く？

富士子 聞くわよ。意味わかんないわよ。

世々子 どした？

久慈 いや富士子さんがさあ、

富士子 今からデートなの。

世々子 今度はどうな人？

富士子 ちよつとね、典介に似てるの。

久慈 似てても典介じゃないからね？

富士子 わかつてるわよ！

城市が来る。

城市 おはよう。

一同 (それぞれに) おはようございます。

城市 典介は？

町田 新たな旅に出て行ってしまいました。

城市 また？

町田 はい。

城市 今度はどこ行っただい。

久慈 どこなんでしょうね。

城市 帰って来たら来るように言っておくれ。あれじゃダメだね。書き直したよ。

世々子 はい、伝えておきます。

城市 頼むよ。

城市、去って行く。

月 はい。ではお気をつけください。それでは。(電話を切る)

久慈 伝えといてくれたってね。

町田 城市に言わなくていいんですか？

世々子 ずっと待ってる方が幸せでしょ？

富士子 あーだこーだ言いながらも可愛がっていたものね。

桑田が来る。

桑田 皆さん、色々お世話になりました。

久慈 え！ 桑っちゃん、帰っちゃうの？

桑田 はい。無断欠勤でもう戻れないかもしれませんが、一応……はい……。

久慈 ホント真面目なんだから。

桑田 これが普通だと思います。

久慈 そう？

町田 久慈さん、見習いましょう。

桑田 世々子さんはいつ出るんですか？

世々子 明後日。

町田 テンスケさんいなくなって、世々子さんもいなくなって、桑田さんもないな

くなって、寂しくなりますね。

久慈 田部ちゃんが戻って来るよ。

世々子 よかったね、久慈。

久慈 まあね。ま、お前もがんばれよ。

世々子 うん。

富士子 テンスケは無事に成仏できたかしら。

久慈 もう書き上げて、念も残ってないでしょ。ね、月さん。

月　もしかしたらだけど……。

世々子　何？

月　テンスケが戻って来させた念はテンスケの念じゃなくて、城市の念かもね。

久慈　は？

町田　生霊？

月　おそらく。もっと早く気づくべきだった。私も勉強不足ね。完全なる透視能力者目指して勉強するわ。がんばるわ。

久慈　がんばるわって……。

町田　あのですねえ、月さん。世の中は形あるものの集まりですから。目に見えないものは存在してないと同然でー！。

典介の声　ただいまー！

一同　え？

一同、上手を見る。

典介の声　やっと着いた！。

と、典介が上手から入って来る寸前で明かりが落ちる。

了